

吉備国際大学研究紀要
(人文・社会科学系)
第25号, 137-147, 2015

大学通信教育への入学と学習活動の実態

藤井伊津子・小池 源吾

On the Actual Conditions of Enrollment and Learning Activity in University Correspondence Education

Itsuko Fujii, Gengo Koike

Abstract

Correspondence education has the longest history among many devices for distance education. Since president William R. Harper initiated it in Chicago University (1892), university correspondence education has contributed toward extending university education beyond campus.

Independent learning (self-study) is a characteristic of correspondence education. Students are used to self-direct their own learning autonomously. This fact implies that university teachers are out of learning sphere of student. Therefore teachers are not able to understand how students learn, or what kind of trouble they confront. It has caused high rate of dropout in correspondence education.

So this article aimed at revealing actual conditions of learning activity in Correspondence Education of Kibi International University. The results of the study are as follows.

1. The students are heterogeneous. Among them, there are differences of the attributes, namely in age, academic background and career.
2. The purpose of entering university is to obtain licenses or certificate ; for primary school teacher(43.6%), kindergarten teacher(41.8%), or nursery(40.0%).
3. Not a few of the students study lessons irregularly. The hours they allot for homework are much various from one hour to 10 hours a week.
4. They acknowledge the demerits of independent-study, comparing with face-to-face education, that is, self-satisfaction, lack of enlightenment , encouragement and fellowship, etc.
5. It is surprising that almost all students are in difficulties in learning, besides many can't work out a solution. This is the reason why learning support should be given in correspondence education.

Key words : University correspondence education, adult student, self-study

キーワード : 大学通信教育、成人学生、独学

吉備国際大学心理学部
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8
Kibi International University
8, *Iga-machi Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)*

1. はじめに

わが国における大学通信教育の歴史は、1885（明治18）年に法政大学と中央大学が創始した「講義録」まで遡る。翌年には早稲田大学も参入して、地方の青年たちに大学教育の息吹を運んだ。1890年にかけては、東洋大学、日本大学、日本女子大学、玉川大学が通信教育部を開設している。

戦後、学校教育法によって制度化された通信教育は、1950年には、正規の大学教育課程として認可される。その後、学歴主義や激化する受験戦争に象徴されるように、大学の門戸が狭まる中で、大学通信教育は独自の地歩を占めてきた。

それにしても、1990年代以降、大学通信教育をめぐる状況の変化には刮目すべきものがある。1994年からの10年間に、18大学で、通信教育課程の開設をみて、大学通信教育の実施校は30となった。わずかな期間に、2.5倍に増加したばかりか、その数は、いまもって増え続けている。専門分野および設置形態の多様化も注目に値する。

さらに、1999年には、日本大学をはじめ4大学が通信制の大学院を開設したことは、いまだ記憶に新しい。文科省にしても、情報通信技術の活用に余念がない⁹⁾。このようにみえてくると、今後、大学通信教育への期待は、膨らみこそすれ、縮まることはありえないだろう。

しかし、通信教育とて、万能ではない。通信教育は独学(self-study)を基調とするがゆえに、教育効果においては、対面教育には及ばないと考える向きはけっしてすくなくないのは周知の通りである。だが、果たして、そうなのか。その精緻な検証がないまま、通信教育の賛否をめぐる議論は、いまなお空中戦の状態を脱しきれないでいるのだ。

地に足のついた、実りある議論をするには、まるでブラックボックスのなかにあって、杓として判らぬ学習活動の実際を白日の下にさらしてみることから始めねばならない。学生たちは、何を思い、何を考えて

いるのか、しかも、多くが社会人であるから成人学生ゆえの困難にも立ち向かわねばならないはずだ。こうした問題意識を念頭に置き、本稿は、大学通信教育に籍を置く学生たちの実像に迫ることを意図している。

アンケートの内容は次の5つの領域から成る。

(1)属性：年齢、性別、学年次、教育歴、職業、保有している子育てに関連する資格・免許

(2)入学動機・入学目的：大学入学の目的・通信教育を選択した理由・本学を選択する際に重視したこと・将来への不安や悩み

(3)学習活動の実際：学習の進展状況・履修科目への期待・授業内容への期待度・テキスト科目についての自習時間・1週間の学習時間の合計・テキストの読み方・テキストについての満足度及び満足していない理由・参考文献の利用程度・自習時における疑問の有無・疑問や問題への対応方法・添削課題について・自習時における困難の有無・その困難への対応方法・通信教育への見解

(4)学習成果の自己診断：教員の資質・能力を構成する9つの位相ごとに、達成度を測る指標になるように、具体的な行動を明文化し4段階評価で自己採点を試みた。

9位相は、次のようである。①学び続ける教師・②社会人としての素養・③教師としての素養・④子どもの理解・⑤学級経営・生徒指導・⑥学習指導・⑦指導計画⑧指導方法・技術・指導評価・⑨連携・協働（同僚教師、保護者・地域等）

(5)大学通信教育システムに対する満足度：5項目について4件法で回答すると共に、満足していない理由について自由記述の欄を設けた。

アンケート調査の対象は、本学通信教育部心理学部子ども発達教育学科に在籍する正科生及び科目等履修生全員：224名

アンケート調査の実施方法。

質問紙によるアンケート調査を2014年8月に郵送で配布、同年9月に回収した。

回収できた標本数は、73(回収率 32.5%)。そのうち有効回答票は、55(24.6%)であった。

以下、有効回答 55 人の属性について概説すると、およそ以下の通りである。

データの分析には SPSS ver22 を使用した。

年代別にみると 20 歳代 27 人(49.1%)と最も多く、次に 30 歳代 15 人(27.3%)、40 歳代 8 人(14.5%)、50 歳代 3 人(5.5%)であった。20 歳未満は最も少なく、2 人であった。

性別では男 14 人(25.5%)、女 41 人(74.5%)と女性が男性の約 3 倍であった。

学年では、1 年次から 4 年次までほぼ同数で、1 年次 11 人(20%)、2 年次 12 人(21.8%)、3 年次 14 人(25.5%)、4 年次 12 人(21.8%)、科目等履修正 6 人(10.9%)であった。

教育歴では、高等学校卒業 28 人(50.9%)と半数以上で最も多く、次に大学・大学院卒業 14 人(25.5%)、短期大学・専門学校卒業 9 人(16.4%)、4 年生大学在学中 4 人(7.3%)であった。

職業では、保育士 5 人(9.1%)、幼稚園教諭 1 人(1.8%)、初等・中等学校教諭 7 人(12.7%)、民間企業 8 人(14.5%)、主婦 5 人(9.1%)、学生 8 人(14.5%)、ほぼ同数であるが、それ以外の、その他の割合が非常に多く、21 人(38.2%)であった。

保有している子育て関連資格・免許については、保育士資格：7 人(12.7%)、幼稚園教諭免許状：7 人(12.7%)、で同数であった。次に、小学校教諭免許状：3 人(5.5%)、中学校・高等学校教諭免許状：6 人(10.9%)であった。

属性同士についてクロス集計の後カイ 2 乗検定を行ったが有意差は認められなかった。

全体的な特徴として、年代は 20 代が半数弱で最も多く、男女比では女性が 3 倍である。教育歴では高校卒業者が半数以上である。職業では保育者・教師・民間企業・主婦・学生以外の「その他」のグループが 4 割近くと最も多かったことが挙げられる。

2. 本学通信教育への入学動機・入学目的

ここでは、本学の通信教育に入学するにあたって、彼らが何を考え、何を期待したかを考察する。

調査では、通信教育部への入学を発意するにいたった目的として、思い当たる項目を列挙し、そこから該当するものすべてを選択してもらった。回答数が多かったものから順次列挙すると、次の通りである。

- ① 小学校教諭の免許を取得するため
..... 24 人(43.6%)
- ② 幼稚園教諭の免許取得するため
..... 23 人(41.8%)
- ③ 保育士資格を取得するため
..... 22 人(40.0%)
- ④ 豊かな教養を身に付けるため
..... 13 人(23.6%)
- ⑤ 学位を取得するため
..... 11 人(20.0%)
- ⑥ なにか人生の転機になるような、きっかけを得るため 6 人(10.9%)

これによると、学士の称号とか、教養を身につけるというよりも、免許や資格の取得という、きわめて具体的で明確な目的をもって通信教育に入学してきたことが判る。希望する免許や資格では、小学校教諭を筆頭に、幼稚園教諭、保育士の資格が続く。

今や、大学全入時代を迎えて、かつてとは比べものにならぬほど、大学の門戸は開かれている。高望みさえしなければ、誰でも大学に入学できる時代である。そうした現下の状況を見やりながら、調査では、通学制ではなく、あえて通信教育を選択した理由を多肢選択で訊ねてみた。

回答率の高かった上位の項目を書き出してみると、次のようである。

- ① 通学しなくてもよいので、社会人としての生活と学業との両立が可能だから

……………47人(85.5%)

- ② 都合の良い時間に、自分のペースで、好きなように学習することができるから

……………20人(36.4%)

- ③ 知り合いや友人から、すすめられたから

……………6人(10.9%)

いじめとか引きこもりが社会問題化し、学校とか教室における集合学習の形態に馴染めぬ若者が増えつつあるご時世であることに鑑みて、選択肢には、「通信教育だと、教師や友人などの人間関係に悩まされなくてすむから」とか、学校や大学等の「教育機関に通うのが好きではない」、「もともとひとりで学習するのが好きだったから」などの項目を盛り込んでいたが、人間関係の煩わしさを嫌って通信教育を選んだと答えた者は、わずか1名のみであった。

通信教育に学ぶ学生の多くは、社会人である。有識者であるから、伝統的な青年学生とは、生活のありようがちがう。伝統的な学生のように、生活の大半をもらばら学業にあてていけばよいというわけにはいかない。大学通信教育は、社会人学生が、現在の生活を維持しつつ、かつ、念願の免許資格を取得するという困難な課題を両立させる貴重な機会であることを、この調査結果ははからずも証左している。

冒頭で触れたように、大学通信教育で提供される専攻や分野は、多様化の一途をたどっている。なかでも、教育は、福祉と並んで、売れ筋と目されている。現在、37大学、9短期大学が教員養成の分野で、通信教育を開設している。だから、調査では、入学先として本学を選定した理由についても訊ねた。数ある大学通信教育の中から、本学を入学先に選定した理由を、1位から3位まで選びだしてもらった。まず、グループごとに、回答の多い順に並べると、以下ようになる。

【第1位グループ】

- ① スクーリングの場所や時期が好都合である

…………… 21人(38.2%)

- ② 学費が安い …………… 19人(34.5%)

- ③ 編入制度がある …………… 6人(10.9%)

【第2位グループ】

- ① 単位認定試験の実施場所が好都合である

……………18人(32.7%)

- ② 希望の資格・免許が取得できる

……………12人(21.8%)

- ③ 編入制度がある……………10人(18.2%)

【第3位グループ】

- ① 希望の資格・免許が取得できる

……………29人(52.7%)

- ② その他 …………… 9人(16.4%)

- ③ 入学の難易度がそれほど高くない

…………… 7人(12.7%)

1位から3位までグループ別にみた回答を全体で集計しなおすと、「スクーリングの場所や時期が好都合である」(28人)と「単位認定試験の実施場所が好都合である」(21人)が上位を占めた。

通信教育は、時間と空間による制約を取っ払うことによって、教育の機会を万人に保障すると言われ、そのように考えられてきた。しかし、通信教育は、大学と学生とが、額面通り、通信によってやりとりをするだけではない。IT化が進展すれば、早晚、居ながらにして学習し、卒業までこぎ着けることができるようになるが、現時点では、そうはいかない。単位認定試験やスクーリングのために、学生は、所定の場所まで出向いていかねばならないのだ。そのことを、学生たちは、強く意識しているという現実をあらためて教えられた。

3. 通信教育学生の学習活動

通信教育の授業方法としては、(a)印刷教材等によるもの、(b)放送授業、(c)面接授業(スクーリング)、(d)メディアを利用した授業、の4種が、「大学通信教育設置基準」で認められている。本学の場合、テキストと添削課題の印刷教材と面接授業(スクーリング)の2

つの方法を中心に学習は進展する。学生と教師の間で、できるだけ密に情報交換ができるように、学習支援の一助として、昨年度から web 学修システムを導入したが、その利用状況からして、学生の間で定着をみたくは言いがたい。

したがって、スクーリング科目を除く、テキスト科目の場合、学習は、テキストと添削課題を軸に展開することになる。

そこで、調査では、現在履修しているテキスト科目について、自習状況を訊ねてみた。回答を集計したものが、図 1 である。

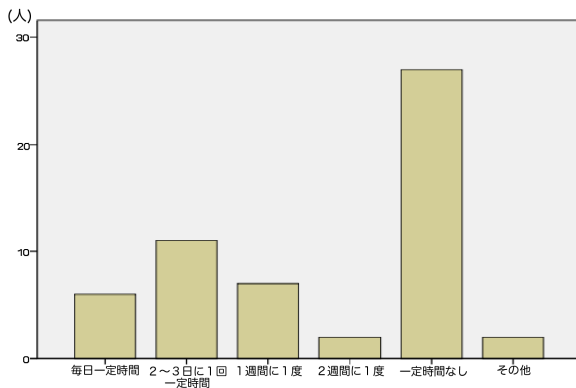


図 1 テキスト科目の自習状況

- ①毎日一定の時間を自習にあてている
..... 6人(10.9%)
- ②2~3日に1回、一定の時間を自習にあてている
.....11人(20.0%)
- ③1週間に1度、一定の時間を自習にあてている
..... 7人(12.7%)
- ④2週間に1度、一定の時間を自習にあてている
..... 2人(3.6%)
- ⑤定期的に自習の時間をとってはいない
.....27人(49.1%)
- ⑥その他 2人(3.6%)

履修する科目が少数ならば、「1週間に1度」の学習でも、対応できるかも知れない。しかし、現実には、相当数の科目を同時に履修しているわけだから、できるだけ高い頻度で定期的に学習する習慣が望ましい。しかし、自習を「毎日」と回答したものは、全体

のわずか1割。「2~3日に1回」を合わせても、3割にすぎない。「定期的に自習する習慣はない」と答えた者が、半数を占めたのにはおどろかされる。

もうすこし踏み込んで、1週間あたりの自習の時間を訊ねた結果が、図 2 である。

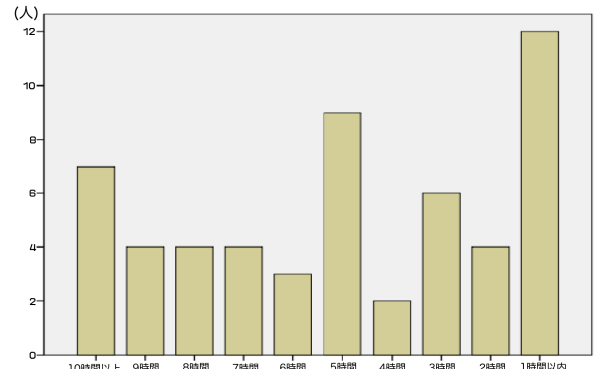


図 2 1週間の自習時間

ちなみに、大学通信教育設置基準は、単位の計算方法を定めた、その第 5 条で、「1 単位の授業科目を 45 時間の学習を必要とする内容をもって構成することを標準とする」と述べている。これに従うと、テキスト科目は、概ね 2 単位科目であるから、90 時間の学習を前提とする計算になる。学期は 4 ヶ月で構成されるので、1週間あたりの自習時間×16(週)が問題となる。それが規定の 90 時間を上まわるためには、1週間につき 5.6 時間の学習をコンスタントに継続しなくてはならない。

そこで、1週間の自習時間が「6 時間」以上と回答した者の割合、すなわち、「6 時間」(5.5%)、「7 時間」(7.3%)、「8 時間」(7.3%)、「9 時間」(7.3%)、「10 時間以上」(12.7%)を合計すると、40.1%となる。しかし、この数字を鵜呑みにしては、糖喜びに終わる。

もともと「90 時間」という数字は、2 単位を認定する 1 科目についての自習時間だったはずである。したがって、仮に 2 科目履修していれば、90 時間の倍の時間を自習に充てねばならないのだ。すると 1 週間あたりの自習時間は 11.25 時間、3 科目を履修している場合 16.9 時間、4 科目では 22.5 時間を自習のために確保しなくてはならない。一人の学生が、1 学期に 4~5 科

目履修するのが常態であることを思えば、調査結果に示された自習時間はあまりに少ないと言わざるをえない。

無論、時間が多ければ、多いほどよいというものではない。学習の質が重要である。自習の基盤をなすのがテキストであるから、その読み方が、学習の成否を決めるといっても言いすぎではない。そこで、自習の際、テキストをどのように読んでいるかを訊ねてみた。

調査票には、1「目次などを手がかりにして、興味がそそられる章や節を選択して読む」、2「難しい用語や語句はあとまわしにして、概要をつかむために読む」、3「気になった箇所の下線を引いたり、要点をノートに書きとったりしながら全体を通して内容を理解するために読む」、4「添削課題を解くのに必要な情報を探しながら、関連箇所をピックアップして読む」、5「著者の主張やその根拠について疑問を投げかけたり、考えながら読む」、6「テキストはほとんど読まない」、の6つの選択肢を設けていた。言うまでもなく、これは、読書のしかたには発展段階があることを考慮して作成したものである。たとえば書店の店頭で、書棚に並ぶ一冊の本に何か惹かれるものを感じたとしよう。その時、自分の関心に合致するかどうか、読む価値があるかどうかを確認するはずだ。それが選択肢の1に挙げた、拾い読みである。面白そうだということが判れば、次には、全体を通して読み、概要をつかもうとする。それが、選択肢2の通読である。さらに引きつけられたなら、重要な箇所にマーキングをしたり、それをノートに書きとったりする。積極的な読み方で、選択肢の3にあたる。関心や熱心さの度合いに応じて、本の読み方は、このように変化し、発展する。だが、さらなる高みには、クリティカルな読み方が待ち構えているのだ。それが、選択肢の5である。こうしたいくつかの読み方を並べたなか、そっと忍び込ませた選択肢が4なのであった。

図3に示されるごとく、テキストを熱心に読む学生は一定数存在することは間違いない。それでも、著者

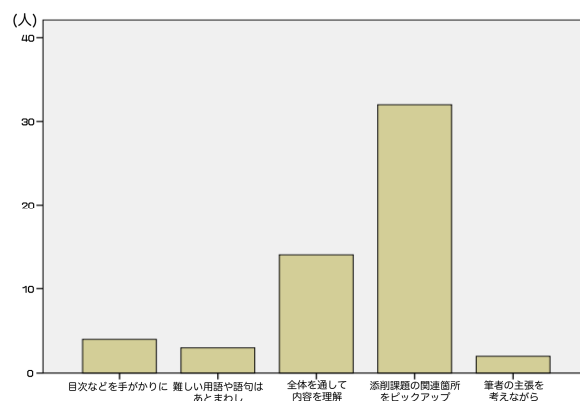


図3 テキスト学習の状況

の主張を相対化するクリティカル・リーディングの域にはいたっていない。それどころか、まず添削課題を通覧して、それら問題を解くのに必要な箇所を拾い読みする学生が多数を占めたのには、驚かされた。それは、読書としては、正攻法と言うにはほど遠く、あまりに功利主義的で、あざとい読み方なのだということを、どのようにしたら納得させることができるのだろうか。

テキストだけを後生大事に学んでいては、視野は広がらないから、ものごとを対置して、比較したり、因果律で捉えようとする思考は育たない。だから、「学修の手引き」などで紹介した参考文献にどの程度目を通してしているかを質問してみた。参考文献の「すべてに」(10.9%)もしくは「いくつか」(30.9%)を合計すると、約4割の学生が「目を通して」ことになる。だが、その一方で、参考文献にはほとんど目を通すことはない学生が半数を超えた。ここからは、学習に対する姿勢において、積極的な学生グループとそうではないグループに2分化している実態が垣間見えてくる。

調査では、自習をしていて、内容が理解できなかったり、疑問に思うことがどのくらいの頻度であるか、そして、そうした問題や疑問にどのように対処しているかを質問した。そうした事態への対処法としては図4に示すように、「よくある」(38.2%)と「ときどきある」(56.4%)を合わせると、ほとんどの者が、自習をしていて、難解な問題や疑問と直面していることになる(図4)。図5によると、そうした事態への対処法とし

では、6割強の者が、「インターネットなどで検索してみる」(61.8%)と回答した。「参考文献にあたってみる」とか、「仲間にたずねる」と答えた者もいたが、全体からするとごく少数である。その意味で、インターネットは突出している。即座に必要な情報が入手できる簡便さから、インターネットに依存する気持ちはわからぬではない。だが、同時に、インターネットから得られる情報にひそむ陥穽を考え合わせるとき、それを補完したり、代替する対処法があまりに貧困なのが気になる。

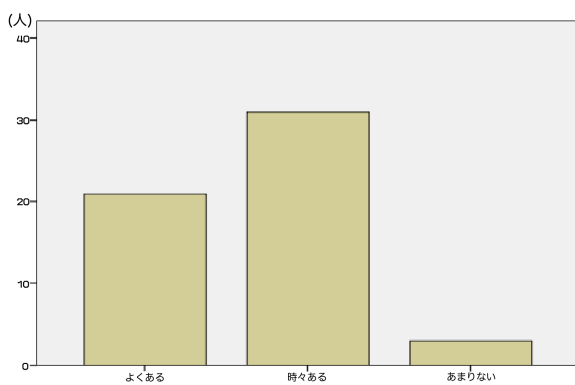


図4 学習での困難・疑問の有無

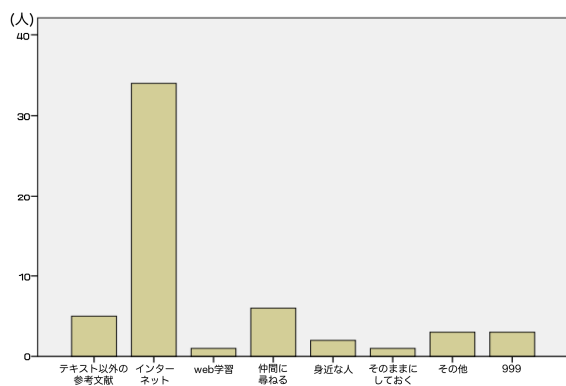


図5 困難や疑問への対応方法

4. 成人の学習と通信教育

前節では、学習活動の実際をみてきたが、学生たちは、自身の現状をどのように捉えているのだろうか。ここでは、学生たちの心情に立ち入って考察を試みることにしよう

それに先だって、履修科目に対して、学生たちは、

どのような感慨を持っているかをみておく必要がある。彼らが履修科目に期待するものは、「幅広い教養」でも、「新しい発想や探求心、学習のしかた」でもない。教育実践と直結しなければ、「教師としての素養」にも、教育に関する「高度な理論や研究成果」にも、そそられることは、まずない。事の是非はともかくとして、彼らの関心は、ひたすら「教育実践に直接役立つ基礎的な知識・技術」に向けられている。

そうした彼らであってみれば、履修科目への満足度がなおさら気になる。履修科目のうち、満足できるものはどのくらいあったかを質問してみると、「ほぼ全部」(14.5%)、「8割以上」(23.6%)、「6割以上」(25.5%)が「満足」と答えている。すくなくとも「半数以上」の科目に満足している学生は、全体のほぼ3分の2に達した。

にもかかわらず、学習活動はかならずしも順調に進行しているわけではないところに、彼らが直面する問題の深刻さが見え隠れする。たとえば、自習をしながら、思うように学習が進まないことがあるかと質問したところ、「よくある」、「時々ある」と回答した者は、それぞれ 38.2%、52.7%を占めた。自習が停滞することが「ある」と答えた者は、なんと、全体の9割を超える。

日常的な自習の集積が通信教育の成果であるから、自習そのものが思わしくなければ、学習全体がうまく行っているという実感も乏しい。実際、学習の進展状況を聞いてみると、「計画通りにうまく進んでいる」と答えた割合は14.5%にすぎない。反対に、約3分の1が、「計画は立てたものの、学習は思うように進んでいない」(27.3%)とか、「この調子だと、学習は、全くの計画倒れになってしまいそうだ」(5.5%)と、否定的な見解を表明している。

その理由には、いろいろなものがある(図6)。それでも、「学習に必要な時間が確保できない」(61.8%)と「職場や家庭での仕事・役割で忙殺されている」(58.2%)の2項目だけは、回答率で突出している。「学習上の悩みや

疑問を聞いてもらえる人がいない」を挙げたものが18.2%いたものの、「学習仲間がいない」(7.3%)、「周囲の人からの支援がない」(1.8%)など、人間関係にかかわる要因は、予想していたほど重大な影響を及ぼしていない。それにひきかえ、「テキストを読んでも、内容が理解できない」(25.5%)、「それぞれの科目のポイントがつかめない」(43.6%)、「疑問が生じても、自分一人では、解決法が判らない」(16.4%)など、すくなくからぬものが、自分に目を向け、学習者としての能力不足を原因に挙げている。

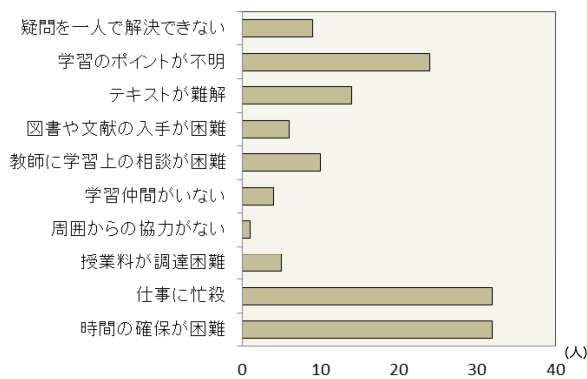


図6 学習を阻害する要因

これが、その場しのぎの言い逃れや取り繕いでないことは、過半のものが、大学通信教育をけっして安直に考えてはいないという事実から推察できる。

図7は、大学通信教育が胚胎する欠点を、学生たちは、どの程度認識しているかを訊ねた結果を示している。

紙幅の都合で、すべての項目について詳説するわけにはいかないので、いくつかを取りまとめて言えば、通信教育は、その学習方法・形態から、「どうしても独善的、独りよがりな学習に陥りやすい」、あるいは、「他者から触発されたり、啓発されたりする機会に乏しい」

ということ、4分の3のものは認識している。とりわけ注目すべきは、「自習は、みずから主体的に学ぶ力が備わっていてこそ成立するものだから、誰もが大学通信教育の恩恵に浴することが出来るわけではない」と投げかけ、賛否を訊いた結果である。なんと、8割もが「そうだ」と答えているのだ。

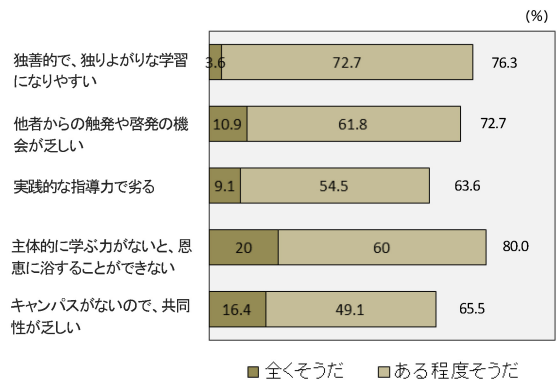


図7 大学通信教育の欠点

大学通信教育に入学した目的は、きわめて明確であった。履修する科目にも概ね満足している。しかし、思い通りに学習が進展している者の割合は、意外に少ない。社会人であるかぎり、さまざまな形で学習活動を制約する。そうした過酷な生活現実と、もうひとつ、通信学生は、対峙せねばならない。すなわち、大学通信教育が、教育方法論的に、万能ではないことを承知しているがゆえに、主体的に学ぶという課題を自己に課したときに、彼らは、学習者として脆弱な自分にはじめて出会うことを余儀なくされる。「あなた自身およびあなたの将来について不安や悩みがあるか」との問いに、半数以上のもの(56.3%)が「ある」と回答しているところに、大学通信教育に学ぶ成人学生の心情が凝縮されているように思えてならないのだ。

註

1)2001年の大学通信教育設置基準改正で、一定の要件の下、メディア授業のみで卒業することが設けられた。これを受けて、文部科学省は、2012年に「大学通信教育等における情報通信技術の活用に関する調査研究協力者会議」を設け、大学通信教育におけるIT活用の推進策を検討している。

参考文献

1. Noffsinger, John S., *Correspondence Schools, Lyceums, Chautauquas*. The Macmillan Company, 1926.
2. Storr, Richard J., *Harper's University The Beginnings*. The University of Chicago Press, 1966.
3. Goodspeed, Thomas W., *A History of the University of Chicago, The First Quarter-Century*. The University of Chicago Press, 1972.
4. 奥井晶『教育の機会均等から生涯学習へ 大学通信教育の軌跡と模索』 慶応通信株式会社 1991年。
5. 通信・遠隔教育研究会編『大学・大学院通信教育の設置・運営マニュアル』 地域科学研究会 2004年。
6. 三井宏隆、小町由香里『大学通信教育に学ぶ人のためのスタディガイド』 慶應義塾大学出版会 2005年。
7. 東谷護『大学での学び方 「思考」のレッスン』 勁草書房 2007年。
8. 『通信教育の大学・短大・大学案内』2014-2015年度用 晶文社 2013年。
9. 文部科学省 HP 「平成25年度学校基本調査」 2013.12.20。
10. 日本大学「平成17・18年度文部科学省「先導的・大学改革推進委託」調査研究報告書 今日の「大学像」のあり方に関する調査研究—メディアを利用して行う授業・通信教育のあり方—」 2007年。

補足資料

1. 通信生へのアンケート調査結果<学習活動の実際>

表1 学習の進捗状況

	度数	%
計画通り	8	14.5
何とか進展	29	52.7
計画したが思うように進んでいない	15	27.3
全く計画倒れ	3	5.5
合計	55	100.0

表2 履修科目に対する期待

	度数	%
基本的な知識・技術	38	69.1
高度な理論や研究	1	1.8
教師としての素養	2	3.6
幅広い教養	7	12.7
新しい発想・探求心・学習のしかた	6	10.9
その他	1	1.8
合計	55	100.0

表3 履修科目への満足度

	度数	%
ほぼ全部	8	14.5
8割以上	13	23.6
6割以上	14	25.5
5割程度	15	27.3
4割以下	3	5.5
2割以下	2	3.6
合計	55	100.0

表4 テキスト科目の自習状況

	度数	%
毎日一定時間	6	10.9
2～3日に1回一定時間	11	20.0
1週間に1度	7	12.7
2週間に1度	2	3.6
一定時間なし	27	49.1
その他	2	3.6
合計	55	100.0

表5 1週間の自習時間

	度数	%
10時間以上	7	12.7
9時間	4	7.3
8時間	4	7.3
7時間	4	7.3
6時間	3	5.5
5時間	9	16.4
4時間	2	3.6
3時間	6	10.9
2時間	4	7.3
1時間以内	12	21.8
合計	55	100.0

表6 テキスト学習の状況

	度数	%
目次などを手がかりに	4	7.3
難しい用語や語句はあとまわし	3	5.5
全体を通して内容を理解	14	25.5
添削課題の関連箇所をピックアップ	32	58.2
筆者の主張を考えながら	2	3.6
合計	55	100.0

表7 テキスト科目についての満足度

	度数	%
全く満足していない	4	7.3
あまり満足していない	8	14.5
ある程度は満足	42	76.4
大いに満足	1	1.8
合計	55	100.0

表8 学習での困難・疑問の有無

	度数	%
よくある	21	38.2
ときどきある	29	52.7
あまりない	3	5.5
全くない	2	3.6
合計	55	100.0

表9 困難や疑問への対応方法

	度数	%
テキスト以外の参考文献	5	9.1
インターネット	34	61.8
web学習	1	1.8
仲間に尋ねる	6	10.9
身近な人	2	3.6
そのままにしておく	1	1.8
その他	3	5.5
対象外	3	5.5
合計	55	100.0

表10 学習を阻害する要因

(複数回答)

	度数	%
時間の確保が困難	32	61.8
仕事に忙殺	32	58.2
授業料が調達困難	5	9.1
周囲からの協力が無い	1	1.8
学習仲間がいない	4	7.3
教師に学習上の相談が困難	10	18.2
図書や文献の入手が困難	6	10.9
テキストが難解	14	25.5
学習のポイントが不明	24	43.6
疑問を一人で解決できない	9	16.4

表 11 大学通信教育の欠点

	全くそうだ		ある程度そうだ	
	度数	%	度数	%
共同性が希薄	9	16.4	27	49.1
主体的に学ぶ力必要	11	20.0	33	60.0
実践的な指導力が劣る	5	9.1	30	54.5
他者からの触発・啓発が乏しい	6	10.9	34	61.8
独りよがりな学習になりやすい	2	3.6	40	72.7